

A salvage technique using a fibrous sheath to avoid the loss of the central veins in cases of pediatric intestinal failure

近藤, 琢也

<https://hdl.handle.net/2324/7182252>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)



氏名： 近藤 琢也

論文名： "A salvage technique using a fibrous sheath to avoid the loss of the central veins in cases of pediatric intestinal failure"

(小児腸管機能不全患者に対する中心静脈温存のための Fibrous sheath を用いたカテーテル交換方法の検討)

区分： 乙

論文内容の要旨

腸管機能不全症 (Intestinal Failure: IF) は短腸症や腸管の蠕動不良により自己腸管からの水分や栄養素の吸収が不十分な状態が長期に持続する病態であり、小児では成長・発達のために長期的な中心静脈栄養 (TPN) の併用が必須となる。TPNを持続的に使用するためには長期留置型中心静脈カテーテル (CVC) を留置する必要があるが、CVCの閉塞や破損、感染など様々な理由によりCVCの入れ替えが必要となる。小児IF患者は、長期にCVCを使用することから、頻回のCVC交換が必要となる。CVCを抜去した場合、中心静脈 (CV) が閉塞する可能性があり、CVの喪失によりTPN継続が困難になると予後に悪影響を及ぼす。当科では、CVC交換に伴うCV閉塞の予防のため、CVC周囲に形成された繊維鞘

(Fibrous Sheath: FS) を用いて、同一ルートからカテーテルを入れ替える方法 (FS法) を行っているが、FS法によるカテーテル留置期間が穿刺法と同等かどうかを検討した報告はない。今回、我々はFS法の有効性を検討するため、後方視的検討を行った。

当科で治療中のIFの患者のうち、2009年から2020年の間にCVC入れ替えを行った患者を対象に、後方視的に検討した。期間中に100例の入れ替えを行い、そのうち85例を対象とした。47例にFS法を行い、40例でFS法による入れ替えに成功した。穿刺法での挿入群と比較して、FS法による挿入でも挿入後の留置期間は同等であった。カテーテル感染症例に対してもプロトコルを順守してFS法を行うことで再感染率は高くないことが示された。FS法は、通常の穿刺挿入方法と同等の留置期間を有しており、穿刺入れ替えに伴う合併症を防ぐこともできた。FS法は残存CV減少を予防しうる方法として有用であると考えられた。